九州産業大学国際文化学部紀要　第11号　67—84（1998）

ジョルジュ・サンド——ギュスターヴ・フローベル往復書簡を読む（V）

持　田　明　子

（1998年1月21日受理）

V．1868年

2人の作家が自らの内面を思うままに語るようになるにつれ，性格や思想の相違ばかりか，それぞれにとっての〈書くこと〉の意味のずれが次第に明らかになるものの，フロベールは友からの手紙を待ちわび，再会の喜びを夢想し，クロワッセへの招きを繰り返す。そしてサンドは5月，2年ぶりに，2度目のクロワッセ訪問を果たす。2人は馬車で遠出をし，夜が更けるまで語り合い，《フロベールは300頁におよぶ朗読をした。》[①]——1868年，2人の老吟遊詩人の絆は一段と揺るぎないものになっていく。

〔手紙71〕　フロベールよりサンドへ

クロワッセ

〔1868年1月1日〕

幸せな年を願うのはまったく間抜けなことですが，それでも，大切な先生，私はそういたします。「それまでの年と同様，その日には，ユダの接吻が多く交わされるであろう，云々」というマテーウス・ランスベルグの予言を外れさせて，私はあなたを愛情をこめて抱擁します。

ノアンでなさっている気晴らしのお話で私を悲しませるのは思いやりのあることではありません！　私はそれに加わることができないのですから。ごくわずかなことをするにも私には多くの時間が必要なので，1869年の夏までにこの重荷の本を仕上げていようとすれば，一分たりとも失う（あるいは節約する）ことができません。

自分の心を抹殺する必要があると言ったのではありません。しかし，それを抑えなければなりません，残念ながら！

私の生活態度は健康法の規則に外れてはいますが，きのう今日始まったことではあり

ません。私は慣れています。とはいえ，かなり疲労困憊しています。そろそろ第二部が終わる時ですから，その後，パリに行きます。今月の終わり頃になるでしょう。カンヌからいつお戻りになるのかおっしゃっておられませんね。1868年を1867年ほど愚かに過ごさないことを，そして，お会いできることを期待しましょう。

なんと酷い寒さでしょう！

モーリスによろしくお伝えください。そして，大切な先生，あなたに心からの愛をこめて

Gve・フロベール

追伸，チエール氏に対する私の憤激はまだ鎮まっていません。その反対です！ 純化され，増大しています。②

〔手紙72〕 サンドよりフロベールへ

ノアン

〔1868年1月12日〕

いいえ，元日に抱擁を交すのは愚かなことではありません。それどころか，望ましく，思いやりのあることですよ。考えてくださったことにお礼を申し上げます。そして，あなたの美しく大きな目に接吻いたします。モーリスもあなたを抱擁いたします。

私はこちらで雪と寒さのため家に閉じ込もっています，旅は延期になりました。私たちは囚人であることを忘れるために，家の中で狂ったように楽しんでいます。そして私は無分別なほど休息の時を延ばしています。朝から夜までまったく文字を書きません。あなたが同じように言うことができれば，なんと幸運でしょう！ それにしても，素晴らしい冬です，ね？ 雪に覆われた木々を照らす月光は美しいでしょう？ 仕事をしながら，夜，こんな光景をごらんになっていますか？

月末パリに来られるのであれば，あなたにお会いする機会がまだありますね。

遠くにいようと近くにいようと，あなたのことを考えています。そして，過ぎ去った歳月の数さえ知らない私の老いた心全体であなたを愛しています。

G・サンド

いつものことですが，母上によろしくお伝えください。この酷い寒さでルーアンにいらっしゃることでしょうね。③

2月10日，夕刻5時頃，サンドは息子とともにパリに到着。その夜のマニー亭での会食には，《フロベール，ブイエ，テオ*，サン・ヴィクトル・ベルトロ，ゴンクール兄弟，Ch. エドモン，ダルトン・セー，ヴェーユ，その他私の知らない18人》④（＊テオフィル・ゴーチエ）が集った。パリ滞在中のサンドはほとんど毎晩のようにマニー亭で夕食を取っているが，当然のことながら，新旧の仲間たちが同席する。14日，金曜日，サンドは再びフロベールらと食事をともにし，

《(……) 6時半にマニー亭に行く。〔ナポレオン〕公が1分後に到着，次いでフロベール，次いでマクシム・デュカン*。楽しい食事，公は魅力的であり，いつものように皆の中で最も力強い。(…》…)》⑤と『手帳』に認めている。

（＊サンドはデュ・カンをデュカンと綴った。）

ついでながら，サンドの膨大な『手帳』（*Agendas*）は，ゴンクール兄弟の『日記』とともに，19世紀後半の文壇・演劇界を中心とした文化人たちの交わりや，その生活の一端を証言する貴重な資料であり，アンヌ・シュヴロ女史の綿密な注釈を付して，2000頁をはるかに越す全5巻となって，最近，出版された。

2月10日，サンドは息子とモーリス・プラネを伴って南フランスに向け，パリを発った：

《マルセイユに正午到着。駅のレストランで申し分ない昼食。2時，トゥーロン。ポンシーと若い娘たちに会う。クロワ（金の十字架）・ドール〔ホテル〕に落ち着く。快適である。3時，タマリスに向けて馬車で出発。なつかしいタマリス，ちょうど7年になるが，何ひとつ変っていない。素晴しい天気，ひどく暑い，繻子のような青い海，(……) グアン氏宅に立ち寄ってみる，彼はもういなかった。新しい住人は愛想がよく，コップ一杯の水を私に差し出す。トゥーロンに戻り，ポンシーの家族と夕食，オーバン医師来訪，変らず魅力的である。(……)》⑥

主としてカンヌの近く，ゴルフ=ジュアンの友人宅に寄寓し，グラス，ニース，モナコなどを訪ね，多くの旧友，知人との再会を喜び，暖かく晴れ渡った好天のもとでの野外の食事を共に楽しんだ⑦。ゆっくりと流れる時間の中で，地中海の風光を賞で，ローマの時代からそこに営まれてきた人々の生活に触れる……かつて，7年前のタマリス滞在が小説『タマリス』（1862）を書かせたように，この旅がやがて紀行文としてパリの読者に語られる⑧ことになるのは言うまでもない。

3月12日朝9時半，トゥーロンを発ち，パリに向かう。

翌13日朝8時，パリ着。

フィヤンティーヌ街の寓居に届けられていた，2人目の孫娘ガブリエル誕生の知らせに，その日の夜，4輪箱型馬車でノアンに向かう。

翌朝7時，ノアン到着。

〔手紙73〕 フロベールよりサンドへ

〔パリ〕タンプル大通り42番地

〔1868年3月15日〕日曜日，夕

さあ？　結構なことです！　まる1か月，お便りがありません！　それにハリス*がいませんから，どこに手紙を出せばよいのかさえ分かりません，大切な先生。

あなたは間もなくパリに戻って来られ，そしてノアンに行かれるにちがいないと彼が私に言いました。それからどうなさるのです？　パリに来られますね？　そして，クロワッセですね。

さあ，ひと言書いてください。美しい文字の数行を……。

あなたを愛し，優しく抱擁します。

あなたの老吟遊詩人

Gve・フロベール⑨

（＊ヘンリー・ハリス(1829—1910)。弁護士。パリの文壇やマチルド妃のサロンに出入りしていた。）

3月17日，サンドはフロベールに手紙を書き，この先，幾度となくその手紙の中で言及することになる孫娘，ガブリエルの誕生を伝える。

〔手紙74〕 フロベールよりサンドへ

〔パリ，1868年3月19日〕

ガブリエル嬢に心からの敬意を，お母さんにおめでとうを，そしておばあ様に乳母の大きな二つの接吻を！

やっとあなたのお便りを手にしました，大切な先生。それも，優しいお便りです，こ

れが二重にうれしいことです。

私は5月20日以前に，パリを発つことはありません。もっとも4月中旬，シャンパーニュ地方に行くために48時間，留守をします，親類の結婚式で立会人をつとめるのです。ところで，私はサンド夫人と田舎の私の家へ帰るつもりでいます，母もそれを願っています。いかがですか？　こうでもしなければ，お目にかかれませんから。

私の旅行のことですが，旅に出たい気持ちが無いのではありません。しかし，小説が完成するまでに出かければ，私はお終いです。あなたの友はろうで出来た人間のようなものです。あらゆることがその上に刻みこまれ，はめ込まれ，中に入り込みます。あなたのお住まいから戻っても，私の頭にはあなたのことや，ご家族のこと，あなたのお住まい，周囲の景色，お会いした人々の表情しかなくなるでしょう。思いをこらすのに大変な努力をしなければなりません。すぐに逸脱してしまいます。熱愛する，優しく大切な先生，私があなたのご家庭の中に座を占め，ひとりごちながら夢想することを自分に禁じているのはこうした理由からです。しかし，1869年の夏（あるいは秋）には，ひとたび野外に放たれるや，私がどれほど立派なセールスマンぶりを発揮するかお分かりになることでしょう。私は見下げはてた人間で，あなたにあらかじめお知らせしておきます。

ニュースに関してですが，例のケルヴェゲンが大往生をとげて以来，平穏が戻りました。茶番劇でした！　しかもおろかな！

サント＝ブーヴは出版法に関する演説を準備しています。確かに彼は良くなっています。火曜日，ルナンと一緒に食事をしました。才気と雄弁で彼は見事でした。そして，一度として目にしたことがないほど芸術家でした。彼の新著をもうお読みですか？　序文が反響を呼んでいます。

気の毒なテオのことが気がかりです。ぴんとしているようには見えません。

私にこれほど早くお返事を書いてくださり，本当にありがとうございます。そして，あなたを心から愛しています。

あなたの老吟遊詩人

Gve・フロベール

それではいつ，『カディオ』を読むことができるのです？　いつ，出版されるのです？[10]

G. リュバン氏によれば，サンドのノート（*Carnet*）に記録が残っている1月19日から4月11日までの，フロベール宛の手紙7通が粉失している。[11]

〔手紙75〕 フロベールよりサンドへ

〔パリ，1868年4月4日〕土曜日

大切な先生

一つ教えてください。あのおそるべきクチュール*はどこに住んでいるのです？ それから，彼ほどの男は私の姪（あなたが知っておられる姪です）のような中産階級の人間に，あなたの肖像のような作品におおよそどの位支払わせるのでしょう？

この前のお手紙であなたは，いろいろと優しい言葉を書いてくださった中で，私が「尊大で」ないとほめてくださいました。高級なものを相手に尊大であるわけにはいきません。従って，この点ではあなたは私という人間をお知りになることはできません。あなたに異を唱えます。

私は自分が好ましい人間だと思ってはいますが，いつも感じのいい紳士ではありません，この前の木曜日に私に起きたことがその証拠です。私が「愚か者」と呼んだとあるご婦人の家で昼食を取った後で，私は，「七面鳥」呼ばわりしたご婦人を訪問しました。これが私の昔からのフランス風礼儀です。最初のご婦人は交霊術のむだ話と理想へのうぬぼれで私をうんざりさせました。二番目のご婦人は私にルナンは「ろくでなし」だと言って私を憤慨させました。いいですか，彼女は彼の本を読んだことがないと打ち明けたのですよ。私が辛抱できなくなる話題があるのです。私の前で友人がけなされると，私の未開人の血がよみがえり，激高してしまうのです。これほど愚かなことはありません！ まったく何の役にも立ちません，それに，私を極度に苦しめるのですから。

もっとも，親しい人の前で友人たちを見捨てるというこの悪徳は並外れて大きくなっているように私には思われるのですが？

復活祭の週，親類の結婚式に立会人として列席するためにシャンパーニュ地方に出かけます。三日かかります。そのあとここに戻ってあなたをお待ちします。

熱はどうですか？

ガブリエル嬢はいかがです？

ご家族の皆様に友情を。あなたには私のすべての愛情を。

Gve・フロベール⑫

（＊トマ・クチュール（1815—1879）。画家。1844年，サンドの肖像を描いた。）

〔手紙76〕 フロベールよりサンドへ

〔パリ，1868年4月〕13日，月曜日

私の大切な先生，

5月20日か24日頃，田舎の家に戻る予定です。従って，あなたには荷造りをする時間がおありです。もっとも，このひどい寒さの中，旅にお出になってはなりません！ あなたの友はおそろしく風邪を引いています，それでも明日，「立会人」として，長老の役を務めるためにシャンパーニュ地方に出かけます！ なんという役目でしょう！

昨晩，私たち，つまり私と 公*は長い間，あなたのことを話しました。公があなたに抱いている敬意と愛情に心打たれました。

『椿姫』の序文をお読みになられましたか？ フェドー夫人のぞっとするような話をご存知ですか？ 等々。ああ！ 私は紙に書けない山ほどの事柄を吐き出すためにあなたにお目にかかりたくてなりません！

あなたの老吟遊詩人の家で，少なくとも，1週間を過ごす必要があります，2日ではありません！

家で，私の傍にいる母も，私と同様，切望しています。非常に強くあなたを抱擁します。

Gve・フロベール

パリの住所にお手紙をください。今週末に戻って来ますから。
プレシ夫人はお元気ですか？
ご家族の皆様によろしくお伝えください。⑬

（＊ナポレオン公ジェローム。）

5月5日早朝，サンドはノアンを発ち，パリに夕刻4時半着。

〔手紙77〕 フロベールよりサンドへ

〔パリ，1868年5月5日？〕火曜日3時

大切な先生，

念のため，お宅に立ち寄ります，お会いできるでしょうか？

今晩，あなたにご用がなければ，リュクサンブール街35番地，コマンヴィル夫人*宅に使い走りを寄越してください。9時までそこにいます。どこへでもあなたと落ち合うために参りましょう。

明晩と明後日の夜はふさがっています。しかし，金曜日と土曜日はまったく自由です。

あなたが明日，(偶然にも)私の界隈をお通りになるようなことがあれば，6時までは在宅しています。しかし，木曜日は1日中，外出しています。

あなたを抱擁いたします。

Gve・⑭

(＊カロリーヌ・コマンヴィル (1846—1931)。フロベールの姪)

5月5日付のサンドの『手帳』：

《(……) ハリスも一緒にマニー亭に食事に行く。そこからフロベールのところへ。10時15分帰宅。トランクを開け，就寝。》⑮

夕食時や，それぞれが所用から解放される時に，たとえそれが短い時間であれ，可能な限り顔を合わせようとしたことを毎日のように交された短信が伝える。

〔手紙78〕 フロベールよりサンドへ

〔パリ，1868年5月9日〕土曜日朝

大切な先生，

別の週の始め，つまり18日か20日頃，クロワッセへ発つ準備をなさってください。ご都合はよろしいですか？

あなたにお目にかかりにはまいりません。一つには，あなたがご不在ではないかと心配ですし，もう一つには，今やらなければならぬ細々したことがたくさんあるからです。

老吟遊詩人の愛をこめて。

Gve・フロベール⑮

〔手紙79〕 サンドよりフロベール

〔パリ，1868年5月11日〕月曜日，夜

水曜日の夜，ご在宅でしたら，あなたの界隈で夕食後，1時間ほどあなたとおしゃべりしに1人で伺います。クロワッセに行くことを少しあきらめています。気の毒な友の運命*が決まるのは明日です。

ひとこと，返事をください。どんな予定も変更されませんように。あなたにお目にかかろうと否と，2人の老吟遊詩人が大層愛しあっていることは分かっています！

G. サンド⑯

（＊サンドの友人であるランベール夫人が出産を控えていた。）

〔手紙80〕 フロベールよりサンドへ

〔パリ，1868年5月12日〕火曜日，9時

いいえ！ 大切な先生，明日の夜はお出にならないでください。妃*のお宅で夕食をしますから，11時前に帰宅していることは不可能なのです。

今週のいずれかの朝，正午までに，あなたをちょっとお訪ねしようと思います。そこで，私たちの行動を決めましょう。

あなたのご心痛に心を痛め，あなたのご心配に苦しんでいます。

あなたを愛しているように，つまり，優しく抱擁します。

老いたる

Gve・フロベール⑰

（＊マチルド妃。『書簡集』（プレイヤッド版）の編者ジャン・ブリュノーによれば，妃は毎週水曜日，親しい友人たちを食事に招いた。）

〔手紙81〕 フロベールよりサンドへ

大切な先生，

〔パリ，1868年5月13日〕水曜日，3時

次の金曜日，マニー亭でご一緒に夕食をとりませんか？ 4時から6時まであなたの界隈で所用があります。

承諾していただけるのであれば，ご返事なさるには及びません。

老いたる者の愛をこめて

Gve・フロベール[18]

5月15日金曜日のサンドの『手帳』：

《(……) ひとりでマニー亭に食事に行く。オデオン座で所用。疲れを感じて，馬車に乗る。回復。フロベール，9時に来る。[19]》

〔手紙82〕 サンドよりフロベール

〔パリ，1868年5月17日〕日曜日

(……) あのなつかしいクロワッセに2日間を過ごしに行けると思います。ですから，木曜日には発たないでください。マニー亭で〔ナポレオン〕公を食事に招きます。あなたを力ずくで確保すると公に言いました。大急ぎで，承知すると言ってください。

あなたを抱擁し，愛します。

G・サンド[20]

〔手紙83〕 フロベールよりサンドへ

〔パリ，1868年5月18日〕

大切な先生

水曜日，ご一緒に食事を取れないだけでなく，クロワッセにおいでになる前にはお会いできません。いつおいででしょうか？

私は，激怒し，くたばってしまう心配がありますから，直ちに発ちます。今，午後2時です。今朝から，ホテルを2つ，転々としましたが，眠ることができませんでした。金曜日の夜以来，眠っていません。私の哀れな頭は破裂しそうです。

お許しください。それでは近い中に

心からの愛をこめて

Gve・フロベール[21]

〔手紙84〕 サンドよりフロベールへ

〔パリ，1868年5月19日〕

ご一緒にはクロワッセに行きません。あなたが眠ることが必要だからです。私たちはおしゃべりしすぎます。あなたが変らずお望みであれば，日曜か月曜に。ただ，仕事を中断なさってはいけません。ルーアンはよく知っています，鉄道駅に馬車があり，少しも迷わず真っすぐにあなたの家に行けることが分かっています。

おそらく夜，行きます。私の代りに母上を抱擁してください，再会できることを喜んでいます。

これらの日があなたに不都合であれば，ひとこと書いてください。またお知らせしましょう。

どうか同封の手紙*に住所を書いて，投函してください。[22]

（＊ルナン宛の手紙。）

〔手紙85〕 フロベールよりサンドへ

クロワッセ〔1868年5月〕20日，水曜日

日曜日でも月曜日でも，大切な先生，お好きなときに。あなたをお待ちしています。あなたの部屋は準備ができています。

日曜日においでになれば，私たちに1日余計にくださるのですね。従って日曜日においでにならなければなりませんね？

ルナン宛の手紙はこの手紙と一緒に投函いたします。

ご到着の時間と日をひとこと，お知らせください。

あなたを愛している老いたる者の愛をこめて。

Gve・フロベール[23]

クロワッセ訪問の日を伝える，5月21日付のサンドの手紙は，その日常生活の一端をきわめて具体的に伝えるばかりか，彼女の気取りなく率直な，そしてきわめて控え目な性格，さらにフロベールやその母への深い心遣いをにじませる。

〔手紙86〕 サンドよりフロベールへ

パリ，1868年5月21日，木曜日

日中の列車は大変遅いので，あなたと一緒に昼食が取れるよう，大いに努力して，日曜日8時に発つ予定です。もし遅すぎるなら，私を待たないでください。私は昼食にオムレツか目玉焼きにした卵を2個と，コーヒーを取ります。夕食には鶏か子牛を少々と野菜です。

真の肉を食べるよう努力するのを断念したところ，胃が再び丈夫になりました。りんご酒は大喜びで飲みます，シャンパンはもう結構ですよ！ ノアンでは安物ワイン（ピケット）とガレットで命をつないでいます。栄養をつけるよう努めなくなってからというもの，貧血になることはありません。だから医者たちの論理を信じてください！

結局のところ，私のことは猫ほどにも構う必要はありません。このことを母上にしっかりお伝えください。とうとう私は2日間，思う存分あなたに会いに行くのですよ！ パリのあなたは簡単に会えない人物であることをご存知ですか？ （……）それでは日曜日に。仕事を中断しないでください。

G. サンド[24]

〔手紙87〕 フロベールよりサンドへ

〔クロワッセ，1868年5月22日〕金曜日，朝

承知しました！ 日曜日，一緒に昼食を取りましょう。けれども，まず，2日以上，滞在なさるよう都合をつけてください，そちらに戻らなければならないことは何ひとつないのですから。

やっとご心配から抜け出られましたね*，結構でした！

あなたを抱擁します，大切な先生。それでは日曜日に！

Gve・フロベール[25]

（＊無事，ランベール夫人が出産。）

幾度となく繰り返され，時に懇願さえされたフロベールからの招きを受け入れ，5月24日，サンドがようやく2度目の訪問を果たしたことは，すでに，冒頭で述べたが，

サンドの『手帳』に認められた文章から，２人がこの滞在を，２年前の時と同様に心ゆくまで楽しんだ様子が浮かび上がる。

○５月24日，日曜日――ルーアン

ルーアン，午前８時。６時起床。ウドゥが８時に私を乗車させる。私に大麦あめをご馳走しようと肩を叩いて，私の目を覚ました軍人と同室になる。別れるときには友人になっていた。駅にフロベールの出迎え。私がサント＝ブーヴのようにならないよう，無理におしっこに行かせる。ルーアンはいつものように雨。母上は前より耳がよく聞こえたが，もう歩行不可能，なんということ！　昼食。雨の落ちてこないクマシデの並木道を歩きながら話す。私は肘かけ椅子で，フロベールは長椅子で１時間半，眠る。再び話す。姪夫婦，フランクリン嬢を加えて夕食。ついで，ギュスターヴが宗教的な笑劇*を私に朗読。真夜中，就寝。[26]

（* *La gueue de poire de la Boule de Monseigneur*）

○５月25日，月曜日――ルーアン

クロワッセ。

素晴しい天気。昼食を取り，馬車で森の中の心引かれるくぼんだ道を通って，サン＝ジョルジュに行く。いたる所にたくさんの花。素晴しい紅色のゼラニウム，ヒメハギ，ゴマノハグサが１本など。サン＝ジョルジュ，非常に美しいロマネスクの古い大修道院。入念に保存された参事会議室。デュクレールに行き馬を休ませる。帰路，カントルーを通り，騎座の上に上がって素晴しい景色を眺める。うっとりして降りる。同じ顔ぶれに平べったい額のコマンヴィル夫人を加えて夕食を取る。フランクリン嬢が歌うが，上手ではない。９時に部屋に上がる。フロベールが見事な300頁*を朗読し，私をうっとりさせる。２時，就寝。ひどく咳こむ。ユリノキは花をいっぱいにつけている。[27]

（*『感情教育』）

○５月26日，火曜日――パリ

１時45分発。

パリ，マニー亭，マク〔シム〕・デュカン。４時にルネ。

ギュスターヴとともに正午にクロワッセを発つ。市の図書館にブイエを訪問，彼は

当惑。1時半，出発，パリまでぐっすり眠る。4時15分，直ちに馬車。着替えをする。マクシム〔・デュカン〕と食事に行く。彼は非常に親切で，律気である。帰宅し，マルチーヌとともに荷造り。門番とけりをつけ，支払う。明日，新たな住居に引越し。[28]

翌日に引越しを控えながら，サンドはこの夜，クロワッセのフロベールに無事帰京した旨を書き送る。

〔手紙88〕 サンドよりフロベールへ

〔パリ，1868年5月26日〕

ゲー＝リュサック街5番地，火曜日夜

ぐっすり眠って到着しました。あなたの律気で魅力的な友デュカンと夕食を取りました。私たちはあなたと母上のことを話しました。そして，あなた方を愛していると何度も言いました。明日朝，引越すためにこれから眠ります。リュクサンブール公園に面した感じのいい部屋です。

あなた方のものである私の心をこめて，あなた方，母と息子を抱擁します。

G. サンド[29]

ここに充ちている優しさこそが，文体との格闘に呻吟し，倦み疲れたフロベールの心を包みこみ，その傷の痛みをしばらくの間であれ，癒すものであっただろう。フロベールは7月5日のルロワィエ・ド・シャントピ嬢への手紙の中で，サンドのクロワッセ滞在に言及しているが，そこに《先月，数日間，われわれの友人サンド夫人が訪問されました。何という資質！　何という力強さ！　それでいながら，一緒にいて夫人以上に心を落ち着かせる人間は1人としておりません。夫人の穏やかさが伝わってくるのです。私は相変らず小説*に没頭しています。書き上げるまでにまだ優に1年は必要です（……）このブルジョアたちとの精神的な共同生活は私に吐き気を催させ，私を疲れ果てさせます。》[30]の言葉を読むことができる。

（＊『感情教育』）

〔手紙89〕 フロベールよりサンドへ

〔クロワッセ，1868年5月28日〕木曜日

あなたのことを考えています，あなたがいらっしゃらなくて寂しい思いをしています。あなたにまたお会いしたいものです，それだけです。あなたにお話できる目新しいことなど誓って，何もありません，大切な先生！　いいえ！　全くありません。

あなたを大層愛していることをもう一度申し上げるようにと母から言いつかりました。それから私も！

老いたる者の愛をこめて

Gve・フロベール

昨晩，『カディオ』を読み始めました。

今秋，こちらで2週間，お過ごしになれるようご都合をつけていただかなくてはなりません。[31]

〔手紙90〕 サンドよりフロベールへ

パリ〔1868年5月29日〕金曜日夜

氷の上を滑るアルシオン*は至るところにいます。名は美しく，かなり知られています。あなたを抱擁します。

あなたの吟遊詩人

10月に，そうですね，努力いたしましょう！[32]

（＊ミズスマシの類と思われる）

〔手紙91〕 フロベールよりサンドへ

クロワッセ

〔1868年6月5日〕金曜日，夜

2通の短信をいただきました。大切な先生。その1つで，ランベール夫人の出産を知らせてくださいました。あなたのためにうれしく思いました。私が以前，先験的に，ま

ったく無知なまま，診断に疑念を表わしたことを覚えていらっしゃいますか？　私はこの仕事をよく知っているのです。

もう1つの短信で，「リベリュル」に代わる語として「アルシオン」の語を書き送ってくださいました。ジョルジュ・プシェは湖のジェル（アメンボの種類）を教えてくれました。さて！　どちらもそれを知らない読者に，その姿を直ちに目に浮かばせるものではありませんから，私の気に入りません。従って，この昆虫を描写することが必要でしょうか？　けれども，それは動きを遅くするかもしれません！　それは風景を埋め尽くすかもしれません！　私は「大きな脚をもった昆虫」あるいは「丈の長い昆虫」にしようと思っています，これならば明快で簡潔でしょう。

『カディオ』ほど私の心をとらえた本はほとんどありません。マクシム*の賞賛に完全に同感ですよ。母と姪が私からこの本を取り上げていなければ，もっと早くあなたにお話できたのですが。やっと今晩，返してくれました。今，机の上にあります。あなたに手紙を書きながら，ページを繰っています。

まず第一に，それはこうであったにちがいないと私には思われます！　はっきりと目に見えます，そこに引きこまれ，心が震えます。どれほど多くの人々がサン＝ゲルタやソヴィエール伯爵やルベックに似ていることでしょう！　アンリにさえも，とはいえ，こうした典型はまれでした。他の人物に比べ，作家の創造になるところの多いカディオについては，私が彼の中でとりわけ好きなのはその度外れの憤怒です。そこに性格の局所的真実があります。人類が憤激に転じ，ギロチンが狂信的な事物となり，存在することが血まみれの夢のようなものにすぎなくなる，これこそがそうした人々の頭の中で起こったにちがいないものです。あなたの本にシェークスピア風の場面があると思います。2人の秘書を伴った国民公会代表者の場面はとてつもない迫力を持っています。大声を上げさせるほどのものです！　最初に読んだとき，非常に強い印象を受けた場面があります。サン＝ゲルタとアンリがポケットにそれぞれピストルを忍ばせている場面です。それから他にも多くの場面があります！　多くの場面です！　161ページ（行き当たりばったりに本を開いています）は何と見事でしょう。

戯曲でしたら，この善良なサン＝ゲルタの正妻にもっと長い役割を与える必要はないでしょうか？　劇にするのが難しいはずはありません。ただ単にそれを凝縮し，要約することですね？　上演することになれば，ものすごい成功を私が請け合います。だが，検閲の方は？

ともかくあなたは大家の，それでいて非常に面白い本をお書きになりました。母は，この本が子どもの頃聞いた話を思い出させると言います。ヴァンデに関しては，母の父方の祖父がレスキュール氏の後にヴァンデ軍の長であったことをご存知でしたか？　フルリオ・ダルジャンタンという名です。そのことで私の誇らしさが増すわけではありま

せん。熱烈な王常派であった母の父は政治的な家系を隠していましたから，事情が疑わしいだけにいっそうです。

母は数日後にディエップの孫娘のところに出かけます。夏のかなりの間，私は1人きりです，猛烈に仕事をするつもりでいます。

「私は大いに仕事をし，社交界をひどく恐れている
未来が築かれるのは舞踏会の中にではない。」

（カミーユ・ドゥーセ）

とはいえ，私の果てしのない小説は時々，信じられないほどに私を打ちのめします！そのつまらぬ市民たちが私には重くて動かすのが大変です！　これほど取るに足りない題材でどうして苦心惨たんするのでしょう！

『カディオ』について非常に長く書きたいと思っていました。しかし，夜も更けましたし，目がひりひりしています。ですから，率直にありがとうございます，大切な先生。

あなたを愛し，抱擁いたします。

Gve・フロベール

モーリスによろしく。[33]

（＊マクシム・デュ・カン。）

――続――

使用したテクストは以下の版である。

George Sand Correspondance XX
(éd. de Georges Lubin, Classiques Garnier, 1985)
abrév. *Corr. S.*

Flaubert Correspondance III
(éd. de Jean Bruneau, Bibliothèque de la Pléiade, Editions Gallimard, 1991)
abrév. *Corr. F.*

George Sand, *Agendas* IV 1867-1871
(éd. d'Anne Chevereau, Jean-Touzot Libraire-Editeur, 1993)

〔注〕

1. George Sand, *Agendas* IV, p. 106
2. lettre de Flaubert à Sand datée du 1er janvier 1868 (*Corr. F.* p. 719)
3. lettre de Sand à Flaubert datée du 12 janvier 1868 (*Corr. S.* p. 671)
4. George Sand, (op. cit. p. 80)

5. (id.)
6. (ibid. p. 82)
7. とりわけカンヌでの日々の文章には，あふれる陽光の中，海や山の自然に抱かれて陶然と過ごした喜びが綴られる。たとえば2月17日，18日の記述《(…) à 9 on part en omnibus. (…) On prend un 3me cheval à Cannes et on va déballer les paniers au fond de la gorge de Mandelieu dans l'Estrelle. Montagnes de porphyre, boisées, sauvages et gracieuses. Un temps magnifique, un pays adorable. On trempe les bouteilles dans le petit torrent. Les muletiers et les âniers qui passent. Déjeuner copieux sur les roches, un soleil à tout casser. On est très gai. On fume, on rit, on remballe, on transporte et on va rejoindre la route et l'omnibus qui gravit roide pendant deux ou trois lieux à travers l'Estrelle, magiquement éclairée, les Alpes et la mer au loin. Dieu que c'est beau. (…)》
(ibid. pp. 82-83)
8. *Le Pays des anémones* (*R.D.M.* 1er juin 1868)
De Marseillle à Menton (*R.D.M.* 15 juillet 1868)
9. lettre de Flaubert à Sand detée du 15 mars 1868 (*Corr. F.* p. 736)
10. lettre du même à la même datée du 19 mars 1868 (ibid. pp. 736-737)
11. cf. *Corr. S.*, pp. 671, 687, 692, 751, 764, 776, 783.
lettres datées du 19 janv, 28 janv, 6 ou 7 fév, 17 mars, 23 mars, 1er avril, 11 avril
12. lettre de Flaubert à Sand datée du 4 avril 1868 (*Corr. F.* pp. 739-740)
13. lettre du même à la même datée du 13 avril 1868 (ibid. pp. 740-741)
14. lettre du même à la même datée du 5 mai 1868(?) (ibid. p. 746)
15. George Sand, (op. cit. p. 99)
16. lettre de Sand à Flaubert datée du 11 mai 1868 (*Corr. S.* p. 810)
17. lettre de Flaubert à Sand datée du 12 mai 1868 (*Corr. F.* p. 748)
cf. p. 1531(Notes et variantes)
18. lettre du même à la même datée du 13 mai 1868 (id.)
19. George Sand, (op. cit. p. 103)
20. lettre de Sand à Flaubert datée du 17 mai 1868 (*Corr. S.* p. 824)
21. lettre de Flaubert à Sand datée du 18 mai 1868 (*Corr. F.* p. 749)
22. lettre de Sand à Flaubert datée du 19 mai 1868 (*Corr. S.* p. 832)
23. lettre de Flaubert à Sand datée du 20 mai 1868 (*Corr. F.* p. 751)
24. lettre de Sand à Flaubert datée du 21 mai 1868 (*Corr. S.* pp. 834-835)
25. lettre de Flaubert à Sand datée du 22 mai 1868 (*Corr. F.* pp. 752-753)
26. George Sand, (op. cit. pp. 104-105)
27. (ibid. p. 106)
28. (id.)
29. lettre de Sand à Flaubert datée du 26 mai 1868 (*Corr. S.* p. 844)
30. lettre de Flaubert à Mlle Leroyer de Chantepie datée du 5 juillet 1868 (*Corr. F.* pp. 768-769)
31. lettre du même à Sand datée du 28 mai 1868 (ibid. p. 755)
32. lettre de Sand à Flaubert datée du 29 mai 1868 (*Corr. S.* p. 852)
33. lettre de Flaubert à Sand datée du 5 juin 1868 (*Corr. F.* pp. 759-760)